採用施設一覧（◎は基幹施設、○は連携施設）

◎大塚病院
◎墨東病院
◎小児総合医療センター

○広尾病院
○豊島病院
○荏原病院
○多摩北部医療センター
○神経病院

研修プログラムの特徴

● 大塚病院（基幹施設）
大塚病院施設群小児科東京医師アカデミー専門研修プログラム

プログラム責任者：小児科　古道　一樹　　プログラム研修期間：3 年

本プログラムは子どもの総合医育成を目的としており、特定の専門領域に偏ることなく幅広い研修が可能です。1・2 年目は都立大塚病院小児科で研修します。小児科指導スタッフは多彩な専門分野を幅広く網羅し、common disease のみでなく、複雑な背景を有する慢性疾患の診療を行っています。当科は基幹施設として 2 次までの救急患者を受け入れており、小児科医として欠くことのできない急性疾患の初期対応から集中治療管理まで一連の研修ができます。また、当院は東京都西北部の周産期医療を担う総合周産期母子医療センターであり、MFICU、NICU、GCU を有し、専門的な新生児医療の研修ができます。さらに当院には小児外科医、小児脳神経外科医、児童精神科医の常勤医がおり、小児の外科的疾患から心の問題まで幅広く経験できます。専門研修 3 年目に最長 9 か月間、連携施設である小児総合医療センター、日本大学医学部附属板橋病院、慶應義塾大学病院で、更なる専門領域の研修を行います。乳幼児健診・予防接種などの小児保健・社会医学は、3 年間を通じて研修します。診療体制としてチーム制を導入しており、月 4 ～ 6 回の日当直業務の翌日はオフとしています。また、互いにカバーし合うことで、duty free の週末を作れるようにサポートします。一般外来診療では、1 年目の夏から、指導医のアドバイスを受けながら、ひとりで診療していただき、自立を促します。小児科の特徴である generalist としての研修を行うとともに、その先のご自身の方向性を定める機会を提供する、サステナブルな未来につながるプログラムを目指しています。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	一般小児科（独り外来開始）						一般小児科					
	1 年次は大塚病院で一般小児科を研修。7 月頃から独り外来診療を開始し、8 月頃から独り当直を始めることを目標に研修を行う。											
2 年次	一般小児科						新生児科			一般小児科		
	2 年次も、引き続き大塚病院で一般小児科を研修。途中 3 か月間、大塚病院の新生児科で新生児疾患を研修。											
3 年次	血液・悪性腫瘍、心臓、集中治療、小児救急など（小児総合医療センター等）									一般小児科		
	3 年次は、大塚病院では研修できなかった分野を、外部施設（小児総合医療センター、日大板橋小児科、慶大小児科より選択）で最長 9 か月間研修。											

● 墨東病院（基幹施設）
都立墨東病院小児科東京医師アカデミー専門研修プログラム

プログラム責任者：小児科　大森　多恵　　プログラム研修期間：3 年

小児科一般領域全体に対応できる小児科専門医になることを目標とします。ほぼすべての領域にわたりもれなく経験できる体制となっています。1 年目は当院小児科のみで 1 年間研修します。2 年目は、当院新生児科（6 ヶ月間）、当院小児科にて研修が不十分な血液・腫瘍疾患（3 ヶ月）・小児麻酔（1 ヶ月間）を院外研修します。3 年目は当院小児科と、各自の希望に基づいた関連施設での研修となります。当院の研修はチーム医療での研修が主体となります。専攻医の下にはジュニアレデント、上には指導医として小児科専門医が配置され、1 チーム 6 名前後で構成されます。院内での各チーム編成と関連施設研修では同学年の研修医は原則 1 名とし、同チーム・同研修施設で重複する研修医

がないように設定します。研修 1 年目から週に 1 回の外来診療（午後）・月 4 回の ER 当直業務を担当します。外来診療では自らが主治医となった患児の退院後の経過観察が主体となります。ER 当直業務では指導医の監督下に小児科医として欠くことのできない救急疾患の対応、急性疾患の管理・慢性疾患の初期対応を研修します。定期的に地域保健所にて乳幼児健診を指導医とともに行い、乳児健康診査・小児保健・社会医学を担当医として研修します。救急を含め症例数は豊富であり、概ね 2 年次までに小児科専門医取得に必要な症例は経験することが出来、学会発表・著者としての論文作成は終了します。そのため、3 年時の研修は半年間を各自の希望により比較的自由に計画することが可能です。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	小児科			小児科			小児科			小児科		
2 年次	新生児科			新生児科			血液・腫瘍疾患（聖路加国際病院）			小児麻酔（小児総合医療センター）	小児科	
3 年次	小児科			小児科			連携施設					

1 年目は当院小児科のみの研修となります。

2 年目は当院新生児科（小児科とは独立しています、6 ヶ月間）、聖路加国際病院（血液・腫瘍疾患、3 ヶ月間）、小児総合医療センター（小児麻酔・1 ヶ月間）、当院小児科（2 ヶ月間）を行います。各研修の順番は他の研修医の研修内容と重複しないように時期を調整するため、順番が前後します。

3 年目は当院小児科（6 ヶ月間）、各自の希望に基づいた院外研修（6 ヶ月間、小児総合医療センターなど）となります。

● 小児総合医療センター（基幹施設）
小児総合医療センター施設群小児科東京医師アカデミー専門研修プログラム

プログラム責任者：副院長　幡谷　浩史　　プログラム研修期間：3 年

小児科専攻医は総合診療科に所属し、主担当医として患者・家族に接し、チーム制のサポートを得ながら学びます。

また、専門診療科の集まる小児病院の中にあって、総合診療科は小児科医の基本・中核を専門とする科であり、病気を診るのではなく人を診る、かゆいところに手が届く医療を実践しています。専門診療科との垣根の低さが当院の特徴の一つであり、一般小児科を超える範囲について、各専門診療科と協力して、より良い医療を提供しています。また、ER 患者（2025 年度 年間約 3.2 万人）および入院症例（平均 42 床）の診療を通じて、小児科の基礎を学び、抱いた疑問 clinical question から臨床研究に結びつけるよう、心がけています。

そして、最も大切にしていることのひとつが若手医師の教育です。3 年間のプログラムで① 1-3 次救急（ER スタッフの協力のもと重症患者・外傷の初期対応、内科 / 外科疾患の入院対応)、②総合診療科外来 (発達・成長障害、健診異常、不定愁訴など、主に急性疾患でない紹介患者さんが対象)、③予防医療（予防接種、こどもの事故予防、児童虐待）、④若手医師の教育（院外の初期、後期研修医の受け入れ）、⑤自主的な勉強会（外部講師招聘）、⑥国内外の学会発表、論文作成、⑦同期で協力しておこなう前向き臨床研究など、盛りだくさんのことを経験します。⑧年 1 回、院内や医師アカデミー発表を行うことで発表の仕方を学びます。またそのテーマを活かして論文を作成し、専門医試験に備えます。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	総合診療科							麻酔科	新生児科			救命救急科
2 年次	総合診療科				地域医療			専門科ローテーション				
3 年次	総合診療科			集中治療科		専門科ローテーション			外来研修	総合診療科		

必修診療科：
総合診療科 17 か月（1 年は担当医、2-3 年は中級指導医）、麻酔科 1 か月（1 年 6 月～ 2 年前半）、新生児科 3 か月（1 年 6 月～ 2 年前半）、救命救急科 1 か月（1 年 6 月～ 3 月）、集中治療科 2 か月（2 年～ 3 年前半）、外来研修 1 か月（3 年）
地域医療 3 か月（1 年後半～ 2 年）多摩北部医療センターおよび周辺開業医、松戸市立総合医療センター、山梨大学連携病院

専門診療科（選択）：8 か月（2-3 年）

● 広尾病院　（連携施設）

指導医責任者：小児科　山本　康仁

小児科専門医の取得を目的として、都心の急性期病院である当院と、基幹病院である小児総合医療センターで、幅広く一般小児医療と救急医療を経験します。新生児医療は大塚病院で３ヶ月かけて研修し、専門領域については、小児総合医療センターの各専門診療科で経験できるほか、０～６ヶ月間日本大学医学部附属板橋病院や日本大学病院の専門診療班をローテイトする選択肢もあります。また、研修期間を通じて、予防接種や乳児健診、地域の保健医療・福祉機関や教育分野との連携など、小児科医として必要なスキルを身につけることができます。実際の研修コースは、各人の希望を踏まえ、３年間という限られた時間を有効に使えるよう、指導医と一緒に考えながら作っていきます。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	広尾病院											
1 年次は、広尾病院で一般診療と救急医療、正常新生児を幅広く研修する。												
2 年次	大塚病院新生児科			小児総合医療センター（総合診療科、各専門診療科）								
2 年次は、大塚病院で未熟児新生児の研修を行うほか、小児総合医療センターで一般診療、救急医療、専門領域の研修を行う。												
3 年次	広尾病院（日大板橋病院）			広尾病院（日本大学病院）			広尾病院					
3 年次は、日大板橋病院・日本大学病院を０～６ヶ月選択し、専門診療班で研修を行うことも可能。広尾病院では一般診療に加え、アレルギー疾患、心身症などの経験を積みながら、専門医に求められる知識の総点検を行う。												

● 豊島病院　（連携施設）

指導医責任者：小児科　中澤　友幸

24 時間体制で救急対応している総合病院であり、一般病院で多くみられる common disease も、大学病院でしかみられないような専門的な疾患も診ることができます。研修初期から主治医として外来・病棟での経験を積むことが可能です。当院で経験することが困難な専門性の高い領域については都立小児総合医療センター（６か月）、順天堂大学医学部附属順天堂医院（血液腫瘍・循環器を各３か月）、順天堂大学医学部附属浦安病院（NICU を３か月）で研修します。地域の乳幼児健診や虐待対応など社会医学的経験を積むことも可能です。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	豊島病院											
2 年次	小児総合医療センター（基幹施設）						順天堂医院（血液腫瘍・循環器）					
基幹施設での研修内容は希望により調整可能												
3 年次	順天堂浦安病院（NICU）			豊島病院								

● 荏原病院　（連携施設）

指導医責任者：小児科　佐藤　弘之

小児科コースは、小児科専門医の取得を目標として、日本小児科学会専門医研修ガイドラインに準拠して研修を行います。基幹施設は、小児総合医療センターで、当院、及び大塚病院新生児科を連携施設とします。研修期間は、18 ヶ月を小児総合医療センターで、12 ヶ月を当院で、６ヶ月を大塚病院新生児科で研修します。小児科専門医の取得には、感冒などの common disease から症例報告するような稀な疾患まで、幅広い疾患領域を経験する必要があります。また、これからの小児科医には、疾患の診断、治療だけでなく、小児保健、育児支援、健康支援、予防医療など、子どもの健全な発育を総合的に支援できるようになることが求められています。これに対応するように、本コースでは、高度医療を行う専門施設と地域に密着した二次医療機関という複数の施設で研修することによって、general pediatrician から subspeciality まで、臨床から研究まで、幅広く対応できるカリキュラムになっています。

小児科

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年次	小児総合医療センター											
	1年時には高度医療施設で、総合診療、三次救急、ICU管理などを研修する。											
2年次	荏原病院											
	2年目から3年目の前半は、地域の二次医療機関として、common disease や小児保健を含めた general pediatirician としての研修を行う。											
3年次	大塚病院新生児科						小児総合医療センター					
	最終年度後半は、subspeciality として、研究テーマをもって研修する。											

● 多摩北部医療センター　（連携施設）

指導医責任者：小児科　柴田　映道

多摩北部医療センターは北多摩北部5市を保健医療圏とする基幹病院です。地域の中核病院として、小児二次救急医療や医療的ケアの必要な在宅重症児に対する診療、また登校困難や発達障害など幅広く入院を受け入れています。また、神経、腎泌尿器、内分泌代謝、アレルギー、睡眠、消化器、循環器等の専門外来を開設しており、専門性の高い診療も展開しています。このような診療を背景に、救急受患者数は年間延べ3000例、入院患者数も延べ4500例を超え豊富な臨床経験を積むことが可能です。研修内容は、初年次には小児診療の基本的疾患について学びます。救急外来で初期対応を、また病棟では入院症例の治療計画を自分で立案し、実際の診療を遂行する能力を養います。二年次は半年間小児総合医療センターにおいて、新生児医療、小児集中医療および小児麻酔を5か月の研修を行います。最終年では将来の専門を見据えてより高度な医療を小児総合医療センターで選択科を6か月間研修してもらいます。このようなプログラムにより、連携施設採用であっても4年次以降のサブスペシャルティ研修をしっかりと見据えた小児科専門医の取得が可能となっています。

当科の研修は自主性を重んじます。与えられたプログラムを遂行する型の研修ではなく、自ら問題点を見つけ解決へアプローチするスタイルです。我々指導医は解答を与えるのではなく、一緒に思考する伴走者的な立ち位置です。

こどもは地域で育まれ社会性を身に付けます。ですから、小児医療も地域との関わりが重要です。当院では地域密着型の小児医療研修を提供しています。

研修コースモデル

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年次	多摩北部医療センター　小児科											
	前半…主に入院症例を担当し小児科医としての基礎を学ぶ　/　後半…救急外来にも対応できる能力を養う。											
2年次	多摩北部医療センター　小児科							(小児総) PICU		NICU		麻酔
	前半…一般病床におけるさらなる研鑽を行い、後輩の指導にあたる　/　後半…小児総合にて麻酔科1ヶ月、NICU・PICU 2ヶ月ずつローテイト											
3年次	循環器	呼吸器	感染症	血液	アレルギー	皮膚	＊府中療育	多摩北部医療センター　小児科				
	前半…小児総合にて専門科20領域の中から希望の科を選択　/　後半…一般臨床におけるさらなる研鑽をおこない、チームリーダーとしての自覚をはぐくむ / 希望者は＊府中療育センターにて研修（1ヶ月）											

（小児総合医療センター 小児科・精神科①壮行会）

（小児総合医療センター 小児科・精神科②壮行会）